
百姫夜行

淡緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百姫夜行

【Nコード】

N9113Z

【作者名】

淡緑

【あらすじ】

人口僅か130人の須農町の一角に聳え立つ冬狼神社には決して溶ける事の無い不思議な氷柱が御神体として祀られていた。ある日町の風習で一人神社の掃除をしていた雪都が好奇心で氷柱に触れた瞬間、氷柱が溶け落ち見知らぬ着物を着た少女が現れた。少女は1000年前に雪都と夫婦の契りを交わしていた大妖怪雪女で、生まれ変わった雪都が自らの封印を解いてくれる日を心待ちにしていたという。

其の壱 人と妖

人口僅か130人の須農町の一角に聳え立つ冬狼神社^{とむらう}。

遡る事平安時代から続く歴史と伝統あるこの場所には決して溶解する事の無い不思議な氷柱が祀られており、未だ現代科学を以つてしてもその証明には至っていない。

西暦2012年12月12日水曜日午前4時 古風な趣を感じさせる日本家屋が軒を連ねる住宅街の一軒から1人の少年が欠伸をしながら現れた。

少年は長く伸びた黒髪から覗かせる茶色い瞳が印象的で何処か他を寄せ付けない独特な雰囲気^{ひみのゆきし}を放つ。

彼の名は氷見野雪都、須農町の隣町にある蛙五巢^{あしす}高校に通う高校2年生。

さて、未だ日も照っていないこの時間帯に雪都が態々向かう先は隣の学校でも新聞配達でも無く町外れにある冬狼神社である。

須農町には独自の風習で毎朝町民が交代で冬狼神社の掃除を必ず行わなければならない。

つまり今日が彼の担当の日であり、その為に近隣の住民が眠る中1人睡魔を堪えて起床した訳だ。

「いつも思うけど、何でこの氷は溶けないんだろう？」

冬狼神社の本殿に上がり雑巾がけをしていた雪都はふと御神体として祀られている氷柱を見上げる。

氷柱からは真白な冷気が漂い室内温度を著しく低下させており本物である事は疑いの余地も無い。

それならば何か絡繰りがあるのではないか、そう考えた彼は氷柱に歩み寄り触れようとす。

無論、如何なる者でさえも氷柱に触れる事は町の掟で禁じられている。

「冷たっ！…やっぱり本物だ…」

氷柱に触れた雪都の手は火傷したようにじんじんと痛みが増し赤く腫れ上がる。

すると突如氷柱が勢い良く冷気を噴射し、瞬く間に辺り一面が真白な冷気に包まれて視界が遮られた。

「取り敢えずここから出ないと…っ！」

危険を感じた雪都は手探りで出口を探そうと試みる。

だが次第に真白な冷気は薄れ、気付けば氷柱が祀られていた場所に見知らぬ少女が座っていた。

少女は凍て付くような紅色の瞳と背中まで伸びた美しい水色の髪に透き通るような白い肌をしており、風変わりな着物を身に纏っている。

「き、君は誰？」

雪都は引き攣った表情をしながら後退りする。

「この一千年とても長かった…妾は生まれ変わった其方が封印を解いてくれる日をずっと心待ちにしておったぞ？」

少女は雪都に歩み寄り、逃げ惑う彼を強引に抱き締め大粒の涙を流す。

彼女の体は生きていると者とは思えない程ひんやりと冷たく、抱き締められた雪都は凍えて身震いした。

「一千年？封印？あの、もしかして君は神様…？」

雪都は震えた声で疑問を率直に少女へ問い掛ける。

「雪都：妾の事を忘れてしまったか？一千年前、其方と永遠に夫婦の契りを交わした雲ではないか。」

少女は頬を赤らめ上目遣いで雪都を見つめる。

「雲？人違いだよ、悪いけど僕は君の事知らないから。」

雪都は自らを雲と名乗る見ず知らずの少女が自分の名前を知っていた事が少し気掛かりだったが、それ以上に氷柱を壊してしまった事をどう良い訳するかで思い悩んでいた。

そんな彼の苦悩を察したのか雲は氷柱が祀られていた場所に赴き、口から冷気を吐いて易とも容易く祀られていた氷柱と全く同等の物

を生成した。

「ふふ、驚いたか？妾わらわはこれでもかつて平安の世にその名を轟かせた大妖怪　雪女だからのう。思いのままに氷柱を作り出す事そや其方なたの心の声を聞く事ぐらい造作も無い。」

雲は勝ち誇った顔をしながら自慢気にそう言った。

「ひいっ！ご、ごめんなさいっ！」

目の前で起こった不可思議な現象を全く飲み込めない雪都は雲に恐れ慄き慌てて本殿の扉を開けて逃げ出してしまう。

そんな臆病な彼の後ろ姿を黙って眺めていた雲はくすくすと不敵な笑みを浮かべ、自らも後を追うように扉を開けて出て行った。

其の貳 かくれんぼ

本殿から飛び出した雪都は想像を絶する光景を目の当たりにし愕然とその場に立ち尽くす。

彼は参道を駆け抜ければ自宅まで向かえると信じて疑わなかったのだが、如何せん冬狼神社の境内は霧の仕業で分厚い氷壁で囲まれていた為に鼠一匹脱出不可能にされていた。

「兎に角、何処かに隠れないと殺される…！」

氷壁で囲まれているとは言え、冬狼神社の面積は氷河が通う蛙五巣高校の有に2倍近い面積がある。

つまり子供一人所か大人数十人が隠れられる場所等幾らでもあり、妖怪と言えどもたつた1人で雪都を探し出すのは砂漠に埋もれた針を見つけ出すよりも困難だろう。

「ふう…ここなら大丈夫だね。」

雪都は極力全体を見渡せる場所に隠れて霧を背後から倒す作戦を思い付き、林の茂みに隠れて絶好の機会を伺う事にした。

それから数十分後 白昼堂々と参道を渡り歩いて来た霧は雪都の隠れている茂みの方を一瞥した後、突如白い霧となつて消滅する。

この頃にはもう雪都は自分の身の周りで次々と巻き起こる超常現象にすっかり慣れてしまい、霧が白い霧になつても然程驚かなくなつていたが…

「ふふ、見いーつけっ！相変わらず雪都はかくれんぼが苦手だのう…さ、今度は其方が鬼の番。ゆっくり十つ数えてから妾を追い駆けるのだぞ。」

不思議な事にほんの数秒前まで雪都から遙か遠方にいた筈の霧は全く気配を感じさせる事無く彼の背後へ移動していた。

流石の雪都もこれには驚愕して顔面蒼白になり、小刻みに身体を震わせる。

「かつ、かくれんぼ…？いや、その…ぼ、ぼぼ僕そろそろ学校行か

ないと遅刻しちゃうから…」

雪都は振り向き様に震えた声で呟いた。

「ほお…其方は妾そなたよりも学校とやらに現を抜かすと申すのだな？」

雲は冷たい眼差しで氷河を見つめ、手の平から作り出した長細く鋭利な氷柱を彼の首筋に向ける。

「い、いえ…そんな事はございま…せん。かくれんぼでも何でも喜んでやらせて頂きます…」

半ば脅迫紛いに答えを強要された雪都は目に薄らと涙を溜めつつ愛想笑いをして頷く。

「うむ、素直でよろしい。では必ず妾わいを見つけるのだぞ？さすれば褒美を遣わすからな。」

雲は軽快な足取りで林の向こう側へと駆けて行き、一旦足を止めて元気良く手を振った。

それを見届けた雪都は彼女に言われた通り目を瞑ってゆっくり10秒数えた後、憂鬱な気分で立ち上がり境内をぐるっと見渡す。

「はあ…これだけ広いと今日中に見つけられるかどうかも怪しいな…」

それから手水舎・絵馬殿・神楽殿・社庭等々…氷河は雲が隠れそうな場所を手当たり次第に探索してみたが、中々見つからず苛立ちを覚え始めていた。

それでも彼はめげずに何度も行き来した回廊を物思いに耽りながら渡り歩いていると、幣殿の方から何やら物騒な物音が聞こえる事に気付く。

「まさか泥棒…！？ちよつと怖いけど行ってみようかな。」

雪都は護身用に地面に落ちていた箒を拾い、成る可く足音を立てないように幣殿へと赴いた。

「むう、賽銭が少ない。この時代は不景気だのう…こんな端金ではあばら家も買えぬわ。」

幸か不幸か彼の予想に反しそこにいたのは泥棒では無く雲だった。彼女は怪訝な表情をしながら賽銭箱から盗んだ金銭を数え、ぶつぶ

つと小言を言いながらそれを財布にしまう。

「まったくんだ罰当たりな妖怪だね君は……」

神をも恐れぬ霧の大胆不敵な犯行に呆れ果てて恐怖心が吹っ切れた雪都は彼女に歩み寄り財布を取り上げる。

「あつ、こら雪都！それを返さぬか！神として祀られたこの妾わらわに献上された物をどうしようわらわと妾の勝手であろう！？」

霧は自分よりも身長が高い雪都から財布を奪い返そうと必死に飛び跳ね微力を尽くす。

対して雪都も霧に財布を取られまいと飛び跳ねて抵抗を続けた結果、やがて霧は力尽きて地面に座り込み頬を膨らませて拗ねてしまった。

其の参 妖刀 雪拿

「全く何が大妖怪だよ、これじゃ唯の賽銭泥棒じゃないか…で、妖怪の君が何だつてお金なんか盗んだのさ？」

雪都は蔑んだ目で雲を睨み、取り返した金銭を情け容赦無く賽銭箱の中に戻した。

お世辞にも勇敢ではない臆病者の彼がこんな行動に打って出たのは幼少の頃から例え家族でも悪事は見逃すなと耳が痛くなる程言い聞かされて育つて来たからだろう。

「ぬえっ？それはその…其方そなたに褒美を遣わすとは申したものの生憎目覚めたばかりで持ち合わせが無い事を思い出してな？それでつい魔が差してしまったのだ…すまぬ。」

余程雪都に叱られた事が堪えたのか、雲は不貞腐れながら弧を描くように木の枝で地面をなぞる。

「まあ僕の為にやったんならそんなに責められないけどさ、もう二度とこんな事しちゃ駄目だよ？　って今は説教してる場合じゃ無かった！雲、僕本当に急いでるんだ。だからあの氷の壁を消してくれないかな？」

雪都は真剣な表情で雲の肩を掴み、何度も氷壁を退かすよう促す。そんな彼の熱弁に言い負かされた雲はぐうの音も出せず、渋々立ち上がり氷壁に手を翳す。

すると見る見る中に氷壁は白い霧となり、風に流れて消滅した。

「口惜しや…折角ここを妾わいわと雪都だけの愛の根城にしようと思って決めておつたのに…」

雲はさぞ悔しそうに着物の袖を噛み締めながらそう言った。

「だから人違いだつて…じゃあ僕行くけど、絶対に人間に悪戯しちや駄目だからね。」

そう言い終えた雪都は雲に背を背け、蛙五巢高校を目指して歩き始めた。

唯黙ってその後ろ姿を儂げに見つめる霧が孤影悄然としているとも知らずに。

「っ…雪都！これを持って行け！」

石段に差し掛かった雪都を霧は涙声で引き留め、懐から取り出した1本の小刀を投げ渡す。

「あの…これ本物の刀…だよな？」

雪都は受け取った小刀の鞘を抜き、刀身をまじまじと眺めながら霧に問い掛けた。

小刀には六花の意匠が施されており、氷の刃で出来た刀身からは絶え間無く冷気が放出されている。

「うむ、それはかつて其方そなたが妾わらわを封じ込めた時に用いた妖刀つな 雪せ 拿。何れ役に立つ時が訪れよう、褒美の代わりに受け取っておけ…」
意味深な言葉を言い残し、霧は何処か物悲しげな表情を浮かべながら白い霧となつて姿を消した。

「はあ、何か頭痛くなつて来た…1時間目は保健室で休もうかな…」
全く身に覚えが無い霧の話の頭の中で整理していた雪都の脳裏にこれまで見た事の無い景色や人物が走馬灯のように駆け巡り、突発的な目眩と頭痛に襲われた。

無情にも登校時間は刻一刻と迫っており、小休止する余裕は無い。

雪都はふらつきながらも石段を降りて鳥居を抜け、地下鉄に隣接した駐輪場に停めて措いた自転車に跨り蛙五巢高校へ向かった。

数分後 蛙五巢高校の西門付近にある駐輪場に自転車を停めた雪都は足早に下駄箱へと赴き、慌てて上履きに履き替え最上階にある自分の教室を目指す。

最上階に辿り着いた雪都は息を荒げながら付き当たりにある“2年B組”と標識が掲げられた教室の扉を開き、その中へと足を踏み入れる。

雪都は賑やかに談笑する生徒達を他所に無言で最前列の窓際の席に腰掛け、身体を休めるべく机に突っ伏した。

本来なら教室に入った時に同級生と一言二言の挨拶程度は交わすべ

きなのだろうか、折り悪くこのクラスには彼と世間話が出る程親しい生徒はいない。

主な原因は多々あるが一つだけ挙げるとするならば蛙五巢高校には全校生徒982人中男子生徒は彼を含めて僅か12人しか在籍しておらず、自然と女子生徒達から炙れて孤立してしまっているからだろう。

そもそも蛙五巢高校の生徒の割合を圧倒的に女子生徒が占めているのは3年前まで女子高であったからなのだが、急激に進む少子高齢化の煽りを受け廃校が決定した学校の生徒達を救済する方法として男女共学へと教育方針を変更した逸話がある。

其の四 転入生

黒板の真上に設置された円状の時計の針が朝のホームルームが始まる午前8時30分を指し示し、校内にチャイムが鳴り響くのとほぼ同時に如何にも厳格そうな風貌の男性が現れる。

男性は左腕に血の滲んだ包帯を何重も巻いており傷だらけな強面の顔をしている。

彼の名は小此鬼童誠（49歳）、雪都達2年B組の担任教師だ。

鬼教師として他校にまでその名を轟かせる童誠は全校生徒から恐れられ、陰で赤鬼と呼ばれている。

それまで賑やかに談笑していた生徒達は童誠の姿を見るなり畏縮し、姿勢正しく口を閉じて席に着く。

「今日は重要な伝達が幾つかあるので朝の挨拶は割愛させて貰う。

濡髪、入って来い。」

教壇の上に立った童誠は扉に向かってそう言うのと廊下で佇んでいた少年が扉を開けて教室へ入って来た。

少年は女性と見間違えるような背中まで長く伸びた黒髪に中性的な顔立ちをした美少年だった。

彼は凜とした態度で童誠の隣に立ち、自分の姿を見てざわつく生徒達を横目に一瞬冷めた表情で雪都を見つめた。

雪都にとって彼は念願の同性のクラスメイトとなる訳だが、心做しか雪都は彼を見て口では上手く言い表せない胸騒ぎを感じて素直に喜べなかった。

「初めまして、今日からこのクラスで皆さんと一緒に勉強させて頂く事になりました濡髪結生です。不束者ですがよろしくお願ひします。」

結生は生徒達にくるりと背を背けてチョークを握り、黒板に自分の名前を綺麗な字で書き終えると振り返って曇りの無い笑顔を浮かべた。

「では濡髪、お前はそこの空席座れ。お前が一日でも早くこのクラスに馴染めるよう考慮して隣は男子生徒にしておいた。」

童誠はざわつく生徒達に黙れと言わんばかりにごほんとか咳払いし、雪都の隣の空席を指差した。

「ありがとうございます。ご期待に添えるよう頑張ります。」

結生は丁寧にお辞儀をして雪都の隣の空席へと腰掛けた。

「へえ…想像していたよりも氷見野君は髪の毛長いんですね。」

未だ一言も言葉を交えた事が無いにも関わらず、結生は恰も慣れ親しんだ様子で雪都に話し掛けた。

「…え？ああ確かに普通の人に比べたら長いかな。でも濡髪、君には負けるよ。」

雪都は思い掛けない結生の言葉に耳を疑い、少し間を開けてからそう言った。

よもや自分に対する結生の第一声が他愛も無い頭髪の話だとは夢にも思わず、動揺していたのだろう。

「皮肉にも聞こえますが…まあ褒め言葉として受け取っておきます。」

結生は肩を竦めて苦笑いした。

「おい、氷見野と濡髪！慣れ合うのは構わんが休み時間以外は私語を慎まんか！」

打ち解け始めた雪都と結生の間に割って入るように童誠は怒鳴りながら机を叩き、鋭い眼光で2人を睨み付ける。

注意を受けた2人は真剣な表情で反省した態度を示したが、内心紅潮した童誠の顔が面白可笑しく笑いを堪えるのに心血を注いでいた。午前11時30分頃 4時限目の体育の準備の為、2人は女子生徒が着替える教室から離れ視聴覚室で黙々と体操服に着替えていた。「2人きりと言うのもそれはそれで悪く無いですね。」

脱いだ制服を丁寧に畳み終えた結生は手持ち無沙汰に室内を見渡した。

「そう？やっぱり濡髪君って少し変わってるよね。でも僕は君が羨

ましいなー頭良いし優しいし格好良いし：今日だけで7人の女の子から告白されたんだっけ？本当に凄いよ。」

朝のホームルーム直後から現在に至るまでに結生は教師が冗談半分で出題した無理難題を解いてみせたり、休み時間になれば自然と彼の元は大勢の女子生徒が群がって来る程の人気ぶりだった。

「性格には8人ですけどね。あ、別に自慢した積もりでは無いですよ？僕ちよつとお手洗いにいかせて貰いますので氷見野君は先に体育館へ行つててください。僕も直ぐに追いつきますので。」

飽く迄も謙虚な姿勢を崩さない結生は軽くお辞儀をしてそそくさと視聴覚室から出て行った。

其の伍 髪切り

結生が去り一人視聴覚室に残った雪都は出会い始めに感じていた胸騒ぎ等当に忘れ、高校生活最初の友達が出来た事を実感し幸せを噛み締めていた。

感傷に浸るのも程々に、着替えを終えた彼は預かっていた鍵で視聴覚室の施錠をしてその場を後にする。

珍しく雪都がご機嫌に鼻歌を歌いながら体育館を目指して廊下を歩いている途中、前方の女子トイレから断末魔にも似た悲鳴が校内中に響き渡った。

数秒後 騒ぎに気付き駆け付けた教師や生徒が周章狼狽している様子を見て徒ならぬ事態が発生した事を察した雪都は知的好奇心に突き動かされ、自らもその場へ赴いた。

「うわ…酷い。一体誰がこんな事を…」
群がる人混みを通り抜けた先で雪都が目当たりしたのは無残に毛髪を切り取られ昏睡している女子生徒と、床一面不気味に金色の毛髪が散らばっている光景だった。

「おい、邪魔だ群がるな！お前らは大人しく教室に戻れ！」

童誠は目的も忘れ興味津津に現場を眺める雪都達野次馬に罵声を浴びせて退かし、担架を持った教師が通行出来る道を切り開いた。

「そうだ！早く体育館行かないと。」
童誠のお陰で我に返って本来の目的を思い出した雪都は足を走らせ体育館へと向かう。

体育館に辿り着いた雪都は先ず真っ先に自分より先に視聴覚室を出た筈の結生の姿を探すも何処にも見当たらない。

確かに便所に寄るとは言っていたものの、寄り道をした雪都よりも遅いのは聊か不自然であった。

きつとまた群がる女子生徒達を一人一人丁寧に対応しているに違いない、そう思った雪都は呑気に欠伸をして床に寝転がった。

「だーれだっ!？」

天井の蛍光灯を見つめる雪都の視界を遮るように結生は両手で彼の目元を覆い隠してくすくすと笑う。

「誰って…僕にこんな事するの君ぐらいしかいないじゃないか濡髪…今まで何処行つてたんだよ？」

雪都はぴくりとも体を動かさずに結生を言い当て、不機嫌な表情をして起き上がった。

「おやおや、そこは察して頂きたかったのですが…勿論お嬢様方のお相手をしておりました。」

結生は遠くで自分を惚れ惚れと見つめる女子生徒達をちらりと見た後、溜め息を吐いて苦笑した。

一方女子生徒達はそんな彼の苦労も知らず、彼が自分達の方を見てくれた事を無邪気に喜んでいる。

「お嬢様つて…君は人が良過ぎなんだよ。もっところ…はつきり断つちゃえば良いのに。」

若干この手の話題に関心が薄れていた雪都は投げやりにそう助言した。

実際は女心や異性に対する知識が皆無なので会話に付いて行けないだけなのだが…

因みに誤解を招かぬよう念を押して置くが当然同性にも興味は無い。「僕も氷見野君が羨ましいです。君みたいに何にも縛られず人間らしく自由に生きてみたい。」

これまで常に笑顔を決やさなかつた結生はこの時始めて沈鬱な顔を雪都に晒した。

「濡髪、僕の事馬鹿にしてるだろ?それじゃあまるで僕が怠け者みたいな言い草じゃないか…」

雪都はそう言い終えるといじけて蹲った。

自覚しているからこそ、それを指摘された時のショックは大きいものだ。

午前11時40分

授業を知らせるチャイムが鳴り、体育館に赤

いジャージを着た細身の女性が現れた。

女性は前髪がぱつっんになった茶髪に黒目で柔和な顔立ちをしており、どちらかと言えば教師よりも保育士が似合いそうな風貌をしている。

彼女の名は速瀬千草はやせちくさ（23）、蛙五巢高校で体育兼2年A組の担任教師を務めている。

「ほんなら授業始めるで。ほないつも通り準備体操し終わったら卓球台を出して15分間練習、その後は総当たりで試合やからな。」
千草の指示に従い、整列していた生徒達は体操の隊形に開いて準備体操を始める。

5分後　順番待ちの行列が出来る程の人気ぶりで女子生徒達から練習相手をせがまれても嫌な顔一つせず勤しんで相手をしている結生の姿を雪都は穏やかに見守る。

偶然結生のポケットから毛先を覗かせる毛髪の束を見つけるまでは。

其の六 生徒会長

結生のポケットに入っているそれは明らかに彼本人の毛髪では無く、先程毛髪を切り取られた女子生徒の髪色と完全に一致する金髪であった。

意図せず結生が犯人である紛れも無い証拠を得て茫然自失になった雪都は中央に置かれたパイプ椅子に座る千草の元までふらふらと歩いて行き、ばつが悪そうに青褪めた顔をした。

「あの…僕気分が悪いので早退させて貰います。」

雪都は俯いたままそう呟き、千草の返事を待たずに体育館から去るうとする。

差し詰め心の中で二律背反に揺れ動く結生の存在に苦しみ、とても授業を受けられる心境では無かったのだろう。

「あ、ちよつと待ちいな氷見野君。おい濡髪君、保健室まで雪都君に付き添ったつてくれへんか？」

千草は雪都の腕を掴んで引き留めつつ卓球の練習をしている結生を呼び寄せた。

何も事情を知らない彼女は雪都と同性である結生に付き添わせるのが最善の配慮だと思ったのだ。

「お任せください、氷見野君は僕が責任を以って保健室まで無事に送り届けましょう。では行きましょうか氷見野君、歩けますか？」

結生は身の細る思いで雪都の身を案じつつ、彼に肩を貸す心遣いを見せる。

「あれ？何か急に気分良くなったよ。やっぱり大丈夫そうだから授業続けるね？」

雪都は自分の体調が回復した事を態とらしく身振り手振りをして気丈に振舞った。

最早何処までが結生の本心なのか分からず、人間不信に陥った雪都は心の底から結生を信用する事が出来無くなってしまったのだ。

「…では体調が悪くなった時は遠慮無く僕に頼ってくださいね？君は少し遠慮しがちな所があるので。」

首を傾げて暫らく沈黙考していた結生はやがて口を開いてそう言う。女子生徒達が待つ卓球台へと戻って行った。

午後12時52分 4時限目が終了し昼休みとなった校内を1人渡り歩いていた雪都の目に血相を変えて美術室から飛び出て行く結生の姿が映る。

「はは、まさか…ね。」

嫌な予感を感じた雪都は倩らに美術室の扉を開く。

残念ながらその予感は悪い意味での中し、室内には毛髪を切り取られた4人の女子生徒が気絶していた。

悲しみに打ち拉がれた彼はその場に身じろぎせずにはいたが、やがて背後の扉を開けて入って来た何者かに拳で後頭部を強打され気を失う。

「痛てて…ん？ここは生徒会室？それに君は誰？」

数分後 意識を取り戻した雪都は目の前のソファーに居丈高に腰掛ける1人の少女の存在に気付き、同時に自分が生徒会室に拉致され椅子に縛り付けられている立場も理解した。

少女は妖艶な顔立ちを引き立たせる豊満な胸に縦ロールの金髪で澄んだ碧い瞳をしており、左腕に生徒会執行部と書かれた腕章を付けている。

彼女の名は揚蝶舞夢^{あげはまいむ}、入学して以来常に学年トップの成績を保持し続ける2年A組の生徒会長で理事長の娘でもある。

「ふん、目を覚ましたようだな俗物…さあ大人しく貴様のやった事を全て吐け！」

舞夢は雪都の胸元を掴み軽蔑の眼差しで睨み付けながら怒号を浴びせた。

「…」 誤解だよ！僕は何もやってない！偶々その…濡か 友達が慌てて出て行った所を見かけたから気になって覗いてみただけだつてばー！」

あらぬ疑いをかけられた雪都は力いっぱい首を左右に振って無実を訴える。

窮地に立たされたこの状況であつても彼が結生の名前を口にしようとしなかったのは、心の何処かで結生が犯人であつて欲しくないという願望があつたからなのかも知れない。

「ふむ…やはりそうか。貴様のような軟弱な男が噂に聞く妖怪“髪切り”である筈がない。」

そう言つて独りでに納得した舞夢は憂いに満ちた顔で雪都を縛り付けていた縄を解いた。

「妖怪“髪切り”？あの…君は確か生徒会長の揚蝶舞夢だよな？妖怪つて一体どういう事…？」

漸く解放された雪都は強引に縛られていた所為で痺れていた手首足首を無作為に振って解し終えた後、そう言つて率直に疑問をぶつけた。

其の七 七不思議

舞夢は雪都の問い掛けに対し、何故か本棚から取り出した1冊の古びたノートを彼に渡して受け答えた。

ノートは黒く滲んだ文字で“蛙五巢高校七不思議”と題され、雪都がページを捲ると中には蛙五巢高校に伝わる妖怪“髪切り”の噂話を含めた7つの怪奇現象に就いて事細やかに記述されていた。

「貴様も噂で耳にした事は無いか？この学校には4年に一度必ず起きる七不思議がある、と。無論私もこんな迷信や妖怪の存在を本当に信じている訳では無い…だが今回の髪切り事件はとても人間が行ったとは思えん程不可解に被害者が犯人を覚えていなければ目撃証言も無い。もしかしたら本当に妖怪の仕業ではないかと思つてな。」

全く解決の糸口が掴めずお手上げ状態の事件に対し、舞夢は眉間に皺を寄せた面構えで自分なりの見解を包み隠さず雪都に打ち明けた。本来彼女は事件を解く責任や義務は無いのだが、どうやら生徒会長として校内で起きた事件は必ず己の手で解決しないと気が済まないらしい。

「…揚蝶、君の連絡先を覚えてくれないかな？そうした方が何かと便利だし。」

雪都はノートを舞夢に返すと鬼気迫る様相でそう言った。

「ふん！庶民の分際で高貴なこの私の連絡先を欲するとは図々しいにも程があるぞ？…と、言いたい所だが今は猫の手も借りたいくらいだからな。良いだろう、教えてやる。」

舞夢は豪華絢爛に宝石が装飾された機能性皆無の携帯端末をポケットから取り出し、正反対に素朴で何の特徴も無い雪都の携帯端末と赤外線通信で連絡先を交換した。

午後3時48分 下校した雪都は寒空の下、冬狼神社に訪れる。

「曇いるなら返事してー！…あれ、やっぱりないのかなあ…」

雪都は誰一人姿が見えない境内を散策しながら大声で曇に呼び掛け

るも、返って来るのは精々鳥の囀りか吹き荒ぶ風の音程度だった。それでも雪都が懸命に霧を探し続ける事30分　遂に彼女は白い霧と共に姿を現した。

「一体何事だ騒々しい…ここを妾の神聖な屋敷と心得ての狼藉ん？雪都！妾に会いに来てくれたのか！？ふふ、嬉しいのう嬉しいのう…」

雪都を侵入者と勘違いした霧はご機嫌斜めに鬼の形相をしていたが、それが雪都本人だと分かると忽ち顔をほころばせて上機嫌になった。「まあ…ね。あのさ、人間の髪の毛を切る妖怪っているの？」

妖怪の事は同じ妖怪に聞いてみれば良い、そう思案していた雪都は霧と出会い頭にそう質問した。

「うむ、それは“髪切り”。奴は人間の長い髪を剪刀になつていて手と口で切り取り喰らう下賤な妖怪、特に美しい女子の髪を好むのう…所で雪都、其方は何故そんな事を聞く？」

そう言い終えた霧はどさくさに紛れて愛くるしく雪都に抱き付き、今度は雪都に自分の疑問を呈した。

彼女は妖怪である自分に何ら興味を示さない雪都が自分以外の妖怪の話題を持ち出した事が少々気に食わなかつたのだ。

「今日学校で女の子達の髪の毛が切られたんだよ…そうだ！明日僕と一緒に学校に行って“髪切り”の正体を見つけてよ！君の力ならどんな妖怪でも退治出来るでしょ？」

雪都は嫣然と笑い、両手を合わせて拝み倒した。

彼は自分に好意を向ける霧なら絶対に頼みを断れる筈が無いと確証があつたのだ。

一千年前の前世の記憶を取り戻し始めたのかは分からないが、どうやら女心は分からなくとも自然と霧の接し方と扱い方は把握していたようだ。

「すまぬ雪都…妾も行きたいのは山々なのだがこの神社には結界が張られておつてな？目覚めたばかりで妖力が弱まっている妾は未だ外へ出られないのだ。だが案ずるな？其方に渡した雪拿がきつと悪

しき者共から其方そなたを守ってくれる。死ぬでないぞ、雪都……」
雪都から離れた震は頂垂れてそう言い残し、白い霧となって姿を消した。

其の八 囃

翌日12月13日木曜日午前7時30分 部活動の生徒ですら未だ誰も登校していないこの時間に雪都と舞夢、それに見慣れない1人の少女の姿が既に生徒会室にあった。

少女は一目瞭然で不健康さが伺える真黒なクマが目元に出来た物腰弱そうな顔付きをしており、桃色をしたセミロングの髪に黄色い瞳をしていた。

彼女の名は美桃静流^{みとうしずる}、1年B組に所属する生徒会執行部の会計で常日頃から舞夢に下僕同然の扱いを受け苦勞が絶えない。

「で、庶民の分際でこんな朝早くにこの私を呼び出したという事は犯人の手掛かりの一つや二つ掴めたんだろっな？」

舞夢は優雅にソファに座りながら威圧的な眼差しで雪都を睨み、紅茶を啜る。

いつもは持ち前の権力を存分に振り翳して重役出勤ならぬ重役登校をしているだけに自分よりも格下と認識している雪都に早朝から呼び出され屈辱を感じていたのだ。

「ごめん、ずっと黙ってたけど…僕は恐らく犯人を知ってる。でも確証は無いし出来れば彼じゃない事を祈ってる。だから揚蝶、君は囃役になってその人が“髪切り”かどうか確かめて欲しい。」

常軌を逸した言葉を雪都はさらっと顔色一つ変えずにそう言い放った。

当然の如く、非常に危険な囃役を舞夢に任せるのは彼の本意では無い。

けれども裏が教えてくれた“髪切り”が好んで標的に定めるような美人の生徒でそんな大それた事を頼めるのは彼女しかおらず、曲がり形にも一晚苦悩した末の決断だった。

「あのう…氷見野先輩、余計なお世話かも知れませんが私なんかで良かったら囃役になりますよう？…そう言えば自己紹介が未だで

したね？私1年の美桃静流ですう。あ、これどうぞ。お口に合うか分かりませんが…」

決断に踏み出せず言葉を詰まらせている舞夢を見兼ねた静流は悠揚迫らぬ態度でそう言い、雪都の目の前の机に紅茶とケーキを置いた。そもそも彼女が会計に抜擢されたのはお茶菓子は勿論、舞夢の身の周りの世話を何から何までする為なので困役等苦にもならないのだ。「ありがとう美桃、でも君に困役は適任じゃないんだ。だから頼むよ揚蝶：まさか怖がってる訳じゃないよね？」

雪都は出された紅茶を一口飲み、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべてそう言った。

そう、彼は紅茶が大の苦手だ。

にも関わらず無理をして飲んだのは静流の好意を無駄にするのは失礼だと思っただからだろう。

「と、当然だっ！この私以外にこんな重大な役目を担える者がいるものか！例えこの身を捧げてでも犯人を捕まえてくれる！」
雪都の挑発にむきになった舞夢は凄厲な剣幕をして立ち上がり、置かれた紅茶やケーキが吹き飛んでしまう程力強く机を叩いてそう言った。

吹き飛んだ紅茶とケーキはまるで意志を持つかのように全て雪都の顔面に直撃し、妖怪と揶揄されても可笑しくない容姿になってしまっ

「…じゃあ決まりね。作戦内容は至ってシンプル、揚蝶は誰にも気付かれないように容疑者と2人きりで屋上に行く。美桃はその状況を作り易くする為に何か騒ぎを起こして皆を引き付けて欲しい。それと実行に移すのは容疑者が登校して来て直ぐだ。本当は2、3時間泳がせて様子を見るのがベストだけどこれ以上被害者は出したくないからね。」

雪都は黙って耳を傾ける舞夢とうんうんと頷きながら手帳にメモを取る静流に淡々とそう語り、顔面にべったりと付着したケーキと紅茶をハンカチで拭いた。

「猿でも思い付きそうな作戦だが……止むを得んな、今回だけは特別に貴様の作戦に乗ってやるから光栄に思えよ俗物？で、肝心の容疑者は一体どんな輩なんだ？」

舞夢は片頬に笑みが浮かべてそう言った。

犯人を捕まえた後、どんな処罰を受けさせようか楽しみで堪らないのだ。

「容疑者は濡髪結生、僕の……友達、いやクラスメイトだよ。」

雪都は脳裏に結生の顔を思い浮かべながら、哀調を帯びた声でそう答えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9113z/>

百姫夜行

2012年1月9日23時51分発行